

YOKOHAMA
YANKEE

横浜ヤンキー

レスリー・ヘルム著 村見子訳



明治初期から4世代にわたって日本で暮らし、先祖に日本人がいて、日本語も難なく話す。それなのに「ガイジン」としか見られないのは一体どんな気持ちなのだろう。

著者は日本生まれの米国のジャーナリスト。曾祖母が日本人だが、子供時代を過ごした日本では外国人のような扱いを受け、進学先の米国でも「アウトサイダー的立ち位置」が続く。どちらの社会にも溶け込めない曖昧なアイデンティティを抱えるが、米国紙の特派員として日本で働き始めると、日本に対する批判的な思いを強めていった。

日本に複雑な思い抱える一族

それが日本人の養子2人を家族に迎えて転機が訪れる。

「日本に批判的なままで、どうやって日本人の良い父親になれるのか」と自問自答。まずは自身を知ること、一族のルーツを探ったのが本書だ。

1869年に米国経由で日本を訪れたドイツ系の曾祖父は、横浜を拠点に運送業で財を築き、日本人と結婚する。祖父、父と繁栄が続くが、第2次世界大戦の勃発によって、一族は日米の両社会で阻害され、結果として日本人を蔑む意識が生まれる。

克明に描かれる日本への複雑な思いは、日本を知るうえで示唆的。日本で暮らす外国人や、両親のルーツがさまざまに「日本人」が増える中、異文化理解の手掛かりになる。村上由見子訳。(明石書店・2600円)

やはり講談社ノベルスはこうでなくては！と膝を打ちたくなる、見事な快作が刊行された。

本年一月、『恋と禁忌の述語論理』で第五十一回メフィスト賞を受賞した、井上真偽の二作目となる『その可能性はすでに考えた』は、デビュー作にも登場した青髪美貌の名探偵——上笠丞を主役とした連作形式の長編本格ミステリーだ。

あるカルト教団が起こした、斬首による集団自殺事件。ただひとり生き残った少女は十数年後、自身の記憶の真偽を確かめるため、上笠に調査を依頼する。状況的に少女にしか殺すことができない、しかし殺せるはずのない少年が、首を斬り落とされたのち、彼女を抱えて祠まで歩いたという驚くべき記憶。調査の結果、上笠はこれを「奇蹟」と断定するのだが、ここから物語は、奇蹟を信じる名探偵と、可能性によって奇蹟を否定する刺客との推理バトルへと発展していく。

『その可能性はすでに考えた』

井上真偽



宇田川拓也

とぎわ書房本店 (千葉・船橋)

文庫15年。文
サテ横を
ミで彦を
好む大い
担当が数
書店員や
書芸全般
ルも正と
崇め

る。一九二九年、アントニー・パークリ
ー『毒入りチョコレート事件』（創元推
理文庫）発表以降、こうしたタイプの作
品は内外の作家群によって無数に紡がれ
てきたが、名探偵が奇蹟を立証するため
に「その可能性はすでに考えた」と反証
していく本作のようなケースは前代未聞
だ。連作ひとつひとつの完成度も極めて
高く、推理の精度、豊富な知識量、意外
性の演出は、今年デビューした新人のな
かでも群を抜いた凄味を感じさせる。も
ちろん物語の着地にも抜かりがなく、推
理バトルの果てに名探偵の口から語られ
る「ストーリー」の美しさは、激しい推
理の応酬で過熱した頭を、清々しい高揚
で心地よく冷ましてくれる。



講談社/972円

新本格ムーブメントの立役者であり、
ミステリー愛好者にとって特別なレーベ
ルである講談社ノベルスならではの、誠
に気迫あふれる勝負作をゆめゆめ読み逃
してはならない。

十行本棚

大河ドラマと日本人

星亮一、一坂太郎
イーストプレス/1620円

NHK大河ドラマの第1作
は1963年の『花の生
涯』。すでに半世紀を超え
る歴史をもつ。最盛期は
「独眼竜政宗」、「武田信玄」、
そして「春日局」が放送さ
れた80年代末だ。大河ドラ
マは日本人の精神にどのよ
うな影響を与えてきたのか。
作家と歴史研究家が探る。

証言で綴る日本のジャズ

小川隆夫
勁草出版/506円

原信夫、秋吉敏子、渡辺貞
夫、山下洋輔といった、日
本のジャズ界をリードして
きたミュージシャンの肉声
が聴こえてくる。また、彼
らと併走してきた油井正一、
相倉久人、湯川れい子など
評論家の証言も収録。戦後
日本のジャズが、生きた歴
史として立ち現われてくる。

五衰の人

三島由紀夫私記
文芸春秋/1318円

三島由紀夫は昭和の元号と
年齢が重なる。昭和45年11
月25日に45歳で自決してか

ら45年が過ぎた。死の直前、
覚悟の「微」を託されたの
が新聞記者だった著者だ。
3年半の濃密な交友。本書
には誰も知らなかった三島
像がある。新潮学芸賞受賞
作の有意義な復刊だ。

横浜ヤンキー

レスリー・ヘルム 村上由見子訳
明石書店/2808円

明治時代、お雇い外国人だ
ったドイツ人ユリウス・ヘ
ルムは日本人と結婚し、8
人の子をもうけた。以後ヘ
ルム一家は、日本とアメリ
カ両国で時局の荒波に巻き
こまれていく。第四世代の
著者が、日本での暮らしと
日本で養子をもらった顔末
など、一家の歴史を語る。

読んで読して語り合う。
都甲幸治 いしいしんじ他
立東舎/1620円

翻訳と世界文学の評論で知
られる著者が、好きな作家
や現代の社会状況、作家と
文学の未来を語り合う。雑
誌での対談やトークショー
など9篇を収録。対話の相
手は作家の堀江敏幸や小野
正嗣、翻訳家の岸本佐知子
や柴田元幸などなど、最前
線の「小説読み」たちだ。